

## 子供の四季(冬)

昔は、本当に雪が沢山降った。

雪の上を滑る、道具を持つている友達はいない、みんな自分で拵えた。源兵衛山は雪の上を滑るのに適当な砂山であった。仁丹の看板は、とても良く滑るので、引つ張り蛸であったし、その他は莫産帽子を敷いて滑った。

機場のステッキは、先を焼いて曲げると、櫛の下に着けて結構な櫛になった。

下の絵は、冬場に近所の納屋に集合し、藁縄を作る藁を打っている。

大抵の納屋の土間には、大きな石が埋められていた。

この中に「謡曲」のできる先輩がいると、「小謡」の一つや二つを習う事が出来た。福嶋では、『宴会』があると、交杯の際に「おさかな」として「小謡」を披露するのが礼儀であった。



十一月三日は、法林寺の報恩講であった。この日だけは、小使いを貰って、玩具や饅頭を買い、見世物を見られた日であった。

十銭か余計貰っても十五銭で、手に汗が出るほど握りしめて「あれこれ」と買う物を、物色して歩く。

「衛生博覧会」の見世物を、どんなものか、今でも思い出す。

吉原釜屋の「おば」に期待した、小使いを貰えず、反対に母に怒られた記憶が懐かしい。「ほんこさま」が済むと本格的な冬がやってくる。

